

出郷の作

佐野竹之助

決然^{けつぜん}国^{くに}を去^さつて 天涯^{てんがい}に 向^むう

生別^{せいべつ}又兼^{またか}ぬ 死別^{しべつ}の時^{とき}

弟妹^{ていまい}は 知^しら^ず 阿兄^{あけい}の 志^{こころざし}

慇懃^{いんぎん}袖^{そで}を牽^ひいて 帰期^{きき}を 問^とう

【作者】佐野竹之助 (一八三八〜一八六〇) 名は光明(みつあきら)。天保九年の生まれ、水戸藩士兵左衛門光誠(みつしげ)の

長子。資性豪宕(ごうとう)、幼より季節を愛し武を好み(特に居合術)、砲術を究めた。万延元年三月三日十七人の同志と井伊大老を桜田門外に襲撃しこれを斃(たお)し、同日重傷の為死去。年二十三。正五位を贈られる。

【語釈】 *決然:決心したさま ・思い切ったさま *天涯:空のかぎり ・遠くへへだたった土地 ・異郷

*慇懃:ねんごろなこと ・ていねい ・親しいまじわり

【通釈】 自分は、故郷水戸を去る決心もでき、今異郷に赴(おもむ)こうとしている。この生別はすなわち死別なのだ。しかし年端(としは)もいかぬ弟や妹は、兄の心も知らず、袖をひいて、帰りはいつなのかと問うのが哀(あわ)れである。

【備考】 この詩は竹之助が井伊大老を斃(たお)さんと水戸を出発する時の断腸の思いを賦したものである。なお、竹之助の襦袢(じゅばん)の衿(えり)に次の辞世の二首が記されていたという。

*桜田の花と屍(かばね)は散らせども なにたゆむべき大和魂
*敷島の錦の御旗もちささげ すめら御軍(いくさ)の魁(かぶ)やせむ